

最愛

for my own therapy

はっきり光を見た それは爆発だった。

そして それを見つづける孤独は思ったよりも深かった。

どこのレストランでウェイターをするとか 結婚する前に店を持つとか でも 故郷にいる両親が気にかかるとか。

何度も書き換えられたメモの横で 電話が光った2月の朝から 3月になるまで僕はすべてを嘘だと思ってたよ。

聖書を読んで家族たちを思い もっと苦しい人がいることを自分に言い聞かせた。

そして誰にも話せなかった。話すことがないように思った。

この悔しさや虚しいこととの戦いから 逃げていたと思うこともなかった。

信じられないと思うけど ある日何気なく見た映画がその日からこの世の全てになったんだ。

友達とのどんな話にも本当のことはなく 現実のつき合いを諦めた

冷たさの中ででも僕は生きていた。

いつかはそんな人たちに 君が会わずにすんだことを喜ぶようになると思ってたよ。

君が今どうしてるかが分からなくて

何もかも曖昧になって 今ここにいることすらも恥ずかしくなるけれど

そんなときのために真実は 多ければ多いほどいい。

アマレットジンジャーのほろ甘さを 僕は君に見せたかったんだ。

遠い宇宙の終わらない円の中で 僕みたいな人が君みたいな人に見つけられる そんな時が来る

。

だから僕は永遠にけがれのない場所を目指し 歩いて行くと誓う。

いつかそこで話すとき 君を僕は笑わせられるだろうか。

最近あった楽しかったこと覚えてる？

いつの間にか思い出せなくなった 君ならいくつ言えたんだろうか。

アイスコーヒーと菓がふた粒。そしてこの物語に君はぞっとするのかもしれないけど もうどうだっていい。もう引き返せない。

愛することを知ったこと 話しても誰も耳も貸さないだろう。もちろん 家族だって。不純といわれるすべてのものが頭の中で競争を始め 弾け飛びそうなところを見せ物にされ 探せば代わりがいるでしょと諭される。

本当にいつてしまった のならそれならいい 大丈夫になるさ 大丈夫に。

してはいけないこと たくさんしてきた。だけど人生はこれっきり。君は死んでしまったけれど 君を好きだということは変わらない。

本当に 大丈夫になるまで忘れない。

冷たい心の頃 抱きしめるものがあって 次のシーンでは抱き合っている頃。  
子供の心で抱いていて それとは別に 人だったものに添いとげようとするする心。

友達だから寄り添わないで。寄り添うくらいならいい。もう友達と思わないでいい。冷たい心の頃 身を守ることも演じぬくことも 同じ無人の夢の中。

遠くの方へ君にさらわれていく。平気なふりしてやっているところだ。  
突然目の前を覆う ごめんなさいが 許してください が 無限のもやとなって立ちほだかり  
僕は立ち尽くす。

だけどこの部屋では 歌いながら泣いたり 朝起きて泣いたり 好きな時に泣けばいい。本当は  
誰にも見られてなんかいないんだから。本当に誰を好きかなんて誰にもわかりはしない。  
ただ 誰でもいいその人の口から それはしかもあなた自身にもわからないと 僕らは言ってほ  
しがった。

そうするうちに君のいた場所から遠く さらわれていく。

水のように  
太陽のように。

何の野心もなく  
まじりけもなく。

ずっと一緒にいて  
ずっと楽しく。

このきらめきと  
きっと君をのせて。

あの背の高い  
眠そうな子を。

何か君にかける言葉  
考えようと立ち止まった  
行けなかった場所  
やりたかったこと  
すべて。

遠くに  
うしろ姿が見える。

どうしても  
ひき戻したい

あと少しで  
届きそうな

あの  
眠そうな子。

想像する。全て白色になった場所で 長い時間を超えて みんな集まりますように。

会いに行くことを待っている人生を終えて 喜びに泣きながら駆けて行きますように。

誰かが死んでしまうことは どんなに決まり悪くても 誰が悪いとか そういうことじゃない。

だけど 80年なら80年 生きればいい。それが終わったあと彼女は 一篇の詩集を手につくしい親友に会いに行くという。

どうかそうであってほしい。

今地上でろうそくが消え ここやそこへ どこでもない場所へ いつか緑と赤と青色のまじった呼び声がこだまするだろうか。

そのときになって初めて みんなのことを好きで良かったと僕は思えるだろうか。





眠りにつこうとすると 彼女の声が聞こえてくる。

こんばんは どうしてる？  
元気がなさそうだけど 嵐の夜もいつか明けるよ。

このまえ 神様と話したの。  
あなたに天使をくださったんだって。  
まだ気づいてないだけで あなたは愛されているんだよ。

落ち込んだときは わたしのことを思い出して。  
なれると信じてきたものに あなたもきつとなれる。  
あなたがわたしを 愛してくれたことを  
わたしは誇りに思ってるんだよ。  
だから 泣くことなんてないよ。

わたしがあなたから離れることなんてない。  
天国へ続く道はいつも あなたの中にあるんだから。

わたしは本をとじる日を選べなかったけど  
あなたの笑顔を見た日には

物語は終わりじゃなかったって思えるんだよ。